社会福祉法人 長野県社会福祉協議会

福祉だより信州

「福祉だより信州」は共同募金の配分金で発行されています。

第802号
令和4年12月25日発行
（毎月25日発行）

未来を担うふくしびと
みらふく
MIRAFUKU

地域共生応援大使
ふっころ

特集

長野県まちづくりボランティアフォーラム2022

2022年12月3･4日　オンライン開催

No.
802
2023　1月号

長野県 まちづくり・ボランティアフォーラム2022

2022年12月3日・4日 オンライン開催

地域の力の根源を探り、活動や活動者の思いを共有し、長野県内に「あい」あふれる豊かな暮らしを発信していくために開催しました。

第1部 地域活動やボランティア活動の根源にある地域への「あい」を共有

第1部では、東洋大学 教授 加山 弾氏をファシリテーター、堺市社会福祉協議会（大阪府）所 正文氏をコメンテーターに迎え、パネリストから、活動を始めたきっかけや思い、活動によって地域や自身にどんな変化があったのか等お話いただき、地域に対する「あい」とこれからを担う次世代のために持続可能な地域を目指していることを共有しました。

終活カウンセラー
矢島 佳代子 氏

両親や自分の夫を亡くしたときにとても辛い経験をし、地域には同じように困っている人も多いのではないかと思い、終活の大切さを広げようと終活カウンセラーとして活動を始めた。

たった一人で始めたこの活動は、たくさん助けてもらった地域への恩返しと、私自身の生きがいとなっていった。活動を続ける中で、多くの方から声をかけていただき、その方々とのやりとりを通して、さらに大きな輪となり、同じ思いの方たちとともに活動ができること、その機会をいただけたことに感謝している。

佐久市岩村田高校
ボランティア班
田中 久留実 氏

ボランティア活動を始めたきっかけは二つ。一つは、児童館でのお手伝い。活動していくなかで、下級生や先生から「ありがとう」と言ってもらえたことが嬉しかった。もう一つは、東京オリンピックの時。たくさんのボランティアが参加していることを知り、その姿に心を動かされた。

自分が行った多くのボランティア活動を通して、ボランティアは地域とのつながりが深いということを学んだ。ボランティアをすることで、地域に貢献できるだけでなく、そこで学んだことを活用して、さらに地域の活動に活かすことができる。若い世代に向けて、もっと多くの人がボランティア活動に興味を持ち、積極的に地域とつながることができる、そんな社会に向けてこれからも活動・発信していきたい。

小海おはなし本舗
菊原 修一 氏

活動を始めたきっかけは、善光寺の案内ツアーに参加したこと。小海町にこんな活動はないし、小海町に伝わる伝統や伝説を私自身もほとんど知らなかった。そして、子どもたちも知らないと気づき、この伝統や伝説が消えてしまうと、町の一部がなくなってしまうのではないかという危機感を覚え、紙しばいで子どもたちに伝えようと活動を始めた。

子どもたちから「紙しばいで知った「野ざらしの鐘」を見てきたよ」と言ってもらい、自分たちが後世に伝えたいことが伝わったと実感し、とても嬉しかった。そして、活動を続けていると、仲間から活動資金をいただき、この活動は色々な人が支えてくれていることに気が付いた。

少しでも地域のことを知っている、大切にするという思いを持った人が地域に広がってくれれば嬉しい。

パネリストとのやり取りの中から、加山氏は「それぞれのボランティア活動を始めるきっかけは様々。当事者性の高い思いから活動を始めたり、自身が活動に飛び込んでみたりと入り口は違うが、3人に共通していたことは、社会や地域に恩返しをしたいということ」とコメントしました。

所氏は「あたらめて私たち社会福祉協議会は、その思いを形にするために、色々なボランティア活動の場やきっかけづくりを充実していかなければいけないと思う。何かやりたい、地域に恩返しをしたいと思うが、それを行動に移せない方がほとんど。その方たちをうまくコーディネートできる力をつけていく必要がある」とまとめがありました。

ファシリテーター
東洋大学 教授
加山 弾 氏

コメンテーター
堺市社会福祉協議会
所 正文 氏

第２部 地域と関わる経験が人を育てる

～地域のこれからを展望し、佐久大学の人材育成と持続可能な地域づくりについて発信～

第2部では、佐久大学から保健医療福祉の総合大学として、どのように地域と関わっていくことができるのか。複雑多様化する地域課題に対応できる人材をどのように育成していくかについて共有しました。

佐久市市民活動サポートセンター
佐々木 愛歌 氏

市民活動とは、どこかの困りごとを解決したい、誰かの生活を充実させたい、そういった気持ちから行われる活動で、居場所づくりや公民館活動、ＰＴＡなどたくさんの市民活動団体がある。

佐久市市民活動サポートセンターは、その活動や団体を「支える」「広める」「つなぐ」をキーワードに佐久地域のさまざまな団体をサポートしている。学生と市民活動団体をつなげることもその一つである。

積極的に地域に関わる学生もいれば、授業の一環だからといってなんとなく参加している学生もいる。関わるきっかけはなんでもよいと感じていて、地域と関わることで、どんどん刺激をうけ、自分の可能性にチャレンジして欲しい。地域にとっても学生にとっても学び合える機会をこれからも作っていきたい。

佐久大学
助教
上西 一貴 氏

佐久大学の＊ＣＢＬ実習は佐久市内にある複数の公民館で行われている活動に学生が参加するプログラム（必須）と、近隣市町村に2泊3日でフィールドワークを行うプログラム（選択）がある。フィールドワークをする地域を事前に学習し、最終日に地域住民を交えて報告会を行っている。

これらのプログラムを通じて大学から見た地域は、学びの場として、福祉を学ぶ前に学生自身が地域や生活に視点が合うため、非常に魅力的で有効性を感じる。

福祉の対象者としてではなく、生活者視点をもつことが、その人の暮らしや地域の文化を大切にできる人材になると思う。しかし、大学が一方的に学生の受け入れをお願いすると、消費的に地域を利用するような関係性ができてしまう。今後、大学と地域で、継続的で実感を伴う互恵的な関係性を作っていくこと目指していきたい。

佐久大学
専任講師
李　省翰 氏

２０１４年に提起された自治体消滅論。その主な原因は少子高齢化だと思う。そこで地域や限界集落において、適切な地域づくり戦略が求められており、地域と大学の連携が重要だと言われている。具体的にどう連携を考えていくか。その一つとして、持続可能性を担保すること。ただ単に「地域とつながりました」で終わりではなく、お互いに地域資源や価値を共有することで持続可能な関係性を作っていく必要がある。また、大学は様々な機能を持っているので、地域づくりの拠点として活用してほしい。

小海町産業建設課
黒澤 大輔 氏

地域の福祉を担う人材となる佐久大学の学生が、まず地域の現状を認識し、それに対する自分自身の意見を持ち行動すること（行動変容）が重要だと考える。その過程を学生が体験することが、地域の責任でもあるし行政の責任と考えているため、小海町は佐久大学ＣＢＬ実習を受け入れている。

受け入れてみると地域側の行動変容がでてきた。例として、学生の体験先となった寺や商店は、学生との意見交換が刺激となり、今までの役割を超えた地域への取組を始めた。地域の現状として、極端になるが諦めや無関心、未来を考えることへの恐怖心があると思う。佐久大学生と関わることによって、小海町に興味を持つ学生との出会える喜びや自分たちが持つ価値の認識・発見があった。学生と地域が協働して何か行動することで、将来に渡って地域を持続可能でよりよくできると思う。

コメンテーターの野口氏から「現代の大学は地域なくして成り立たない。ローカルに基盤を置き、グローカルの視点で考えていくということが、これからの大学に求められている。また、長野県は社会教育が進んでいるので、ここに注目する必要がある。

どうしても社会福祉や地域福祉を教えるときに、理念や制度、ソーシャルワーク等、どういう技術を使うかを教えてしまっているので、それは誰のためにするのかという大事な視点が抜けがちになる。学生がその視点を持つためには市民活動やＣＢＬ実習を通じて地域と関わっていく必要がある。地域循環型の福祉文化や経済の考え方からすると、地域に富と人材を残していくことが重要。そうでなければ地域が消滅してしまう。大学はその人材を育成する役割がある」とまとめていただきました。

＊ＣＢＬ実習：地域の生活文化に関心を寄せながら、地域の暮らしに触れ、住民と継続的な交流をすることで多様な価値観を理解することを目的としている実習プログラム

進行
佐久大学　教授
長谷川 武史 氏

コメンテーター
佐久大学　教授
野口 定久 氏

7つの分科会

フォーラム2日目は、7つの分科会を設けテーマごとに内容を深め、今後の豊かな暮らしへ向けた取組を発信しました。ふくしをボランティア分野の人だけで担うのでなく、いかに多様な地域の担い手や多機関との協働を進めていくことが今後求められています。

個別支援から地域支援や、まちづくりへ広がる活動、おもしろい・楽しいなど、まちづくりへの関心ごとから、多くの地域住民のかかわりやつながりをつくる、地域住民を主体とした地域づくりを推進していく活動など、ボランティア活動や地域活動の担い手など、そのすそ野を広げていく方法や実践を聞くことができました。

第1分科会

みんなの暮らしぶりから考える本当の地域づくり
～支えあい・助けあいを地域に返そう～

誰もが安心して暮らせるまちづくりの「誰もが」とは？ボランティア活動と地域福祉の持つ本来の意味合いなどを、登壇者とともにコーディネーターの酒井保氏とワイガヤ座談会を行いました。悩みや思いなど皆で支えあい・助けあいの意味合いを考えました。

第2分科会

地域における学びあいを地域でつなごう
～みらいを創造・育むための地域づくりと社会教育と福祉教育～

社会教育と福祉教育との協働により、人間力を育む取組を多世代へ広げていくことへの期待や暮らしへの影響など、事例を通じ紐解きました。みらいを創造し、育むためのヒントは、地域における「対話の場」や「学びの場」などの機会にもあります。対話の場や学びの場から地域に派生していくことを期待します。

第3分科会

中山間地域の豊かな支え合いの種を見つけよう（活動見本市）

活動紹介をVTRと活動紹介パネルで行いました。

第4分科会

企業と地域が連携したSDGsの取り組みを進めよう

防災、環境、子ども若者支援など、広域で活動する企業のSDGs活動と地域のボランティア、NPO、社協等が協働して支えあいの地域を創りたい思いを持ち寄りました。自分にできることは何か考え、一歩踏み出し始めてみること。そこからできるつながりや資源が地域への貢献や安心へとつながることに期待します。

第5分科会

人との出逢いで人生変わる
～未来への期待を描く、子ども・若もの応援プロジェクト～

社会的養護出身の若者たちは、社会に出てお金・住まい・仕事・孤立など様々な問題を抱えています。未来ある子ども・若者が羽ばたくために、一人で悩まないこと、子どもの居場所づくり、人との出逢いなど多様な社会とのつながりや学び、体験や活躍できる機会、出会いの場の大切さや活用などを話し合いました。

第6分科会

私らしいエンディングを迎えるために
～最期まで「自分らしく」あるために、備えたいこと～

私らしいエンディングを準備して、今を生き生きと生きていくには、どんな仕組みを使いたいか「支える人」も「支えられる人」も共に話し合う機会となりました。

第7分科会

地域とともに
～災害コミュニティソーシャルワークの展開を～

住民をはじめとする地域資源とともに取り組む「災害コミュニティソーシャルワーク」の展開について学び、台風19号災害の実践より具体的な話題提供がされました。それらを受けて、地域とともに・地域と連携した災害ボランティアセンターの運営や復興期の生活支援につなぐことなど、目指す方向性を話し合いました。

ナイトセッション
信州の地域福祉のあゆみと未来へ向けたエール

信州の地域福祉に取り組んできた実践者・コーディネーターの実践を振り返り、記録として地域実践を積み上げていきます。今回は３つの活動実践の発表を通じ、新しい世代や社会背景の変化を見据えた信州の地域福祉活動への思いや方向性を参加者とともに語る機会になりました。

実践報告

司　会

信州の地域福祉研究会
小池 正志 氏

信州の地域福祉研究会
矢澤 秀樹 氏
（伊那市社会福祉協議会）

信州の地域福祉研究会
土屋 ゆかり 氏
（長野市社会福祉協議会）

前軽井沢町ボランティアセンター
運営委員長
山岸 征男 氏

フォーラム開催地域で盛り上げてくれた皆さん

佐久ブロック幹事社協　山田 翔太

佐久ブロックの市町村社協も「長野県まちづくり・ボランティアフォーラム２０２２」の運営に協力しました。参加される方が一堂に集い、実践者の生の声を聴くことが本来の形ではあると思いますが、現在の感染状況を踏まえると、オンライン形式でも実施できたとこで、ボランティアや地域活動に思い巡らせ、「学び」続けることが重要であり、まさしく、本フォーラムのテーマでもある「地域」を想う、「人」を想う、人の心を動かす原動力の「愛」が発信できたのではないかと思います。

私たちの職務としても、今まで築き上げたボランティアや地域の活動が豊かな未来の架け橋になるべく、活動者の想い、その背景にあるストーリーを大切にしながら、私たちもともに歩んでいきたいと改めて見つめる機会となりました。

佐久大学　長谷川 武史

この度は本学を会場に設定いただけたことで、県内の地域福祉関係者の皆さんとの接点を持つことができました。開設して日が浅い学部としては大変貴重な機会となりました。

参加した学生にとっても良い学びの場となりました。

今後とも教育・研究・実践の面で地域に貢献していくことが出来れば幸いです。

さらなる「あい」あふれる豊かな地域を目指して

新型コロナウイルスの影響により、３密を避けるために、多くの地域活動やボランティア活動は中止の選択を余儀なくされました。

その結果、今まで当たり前のようにあった地域の「つながり」が切られてしまい、互いに助け合うことができていた関係性の希薄化が懸念されています。そこで、地域づくりを担う専門職が連携し、「つながり」を切らないよう実践を重ねてきています。

一方で、コロナ禍によって新たに生まれたボランティア活動や、活動の意味を再確認し工夫を凝らして継続している活動もあります。

「こんなときだからボランティア活動をしよう！つながりを切らないようにしよう！」と力強い声が地域のあちこちから聞こえてきています。今、あらためて注目しなければならないのは、これらの地域の力です。

住民主体の地域づくりには地域への「あい」が大事です。その「あい」を育むのは、地域に助けられた経験やボランティア・市民活動に参加した経験、文化や伝統を学ぶ経験ということをこの２日間で共有しました。

それらの経験をする場やきっかけをどう作るか。社会教育や公民館活動、ボランティア活動や教育機関のプログラムがきっかけとなります。また、地域に関わる経験は学業や仕事の枠を超えた学びをもたらします。

自身の人生をより豊かにし、学びから実践につながったときに、持続可能で誰もが安心して暮らせる地域づくりにつながると信じています。

日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償!!

令和４年度

ボランティア活動保険

商品パンフレットは
コチラ
（ふくしの保険ホームページ）

保険金額・年間保険料（１名あたり）

団体割引20%適用済／過去の損害率による割増引適用

保険金の種類＼プラン		基本プラン	天災・地震補償プラン	【新設】特定感染症重点プラン
ケガの補償	死亡保険金	1,040万円		
	後遺障害保険金	1,040万円（限度額）		
	入院保険金日額	6,500円		
	手術保険金 入院中の手術	65,000円		
	手術保険金 外来の手術	32,500円		
	通院保険金日額	4,000円		
	特定感染症	補償開始日から10日以内は補償対象外(*)		初日から補償
	地震・噴火・津波による死傷	×	○	○
賠償責任の補償	賠償責任保険金（対人・対物共通）	5億円（限度額）		
年間保険料		350円	500円	550円

＊4月1日付で前年度から継続して契約される場合は初日から補償します。

＜基本プランに加入される方へ＞

基本プランでは、地震・噴火・津波に起因する死傷は補償されません。

◆年度途中でボランティア活動保険に加入する場合には「特定感染症重点プラン」への加入をおすすめします。

例えば、被災地での災害ボランティア活動や当初予定していなかったボランティア活動への参加にあたり、新型コロナウイルス感染症をはじめとした特定感染症への備えとして、特定感染症重点プランに加入いただきますと、より安心してボランティア活動に参加いただけます。

ボランティア行事用保険
（傷害保険、国内旅行傷害保険特約付傷害保険、賠償責任保険）

送迎サービス補償
（傷害保険）

福祉サービス総合補償
（傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険（オプション））

● このご案内は概要を説明したものです。詳細は、「ボランティア活動保険パンフレット」にてご確認ください。●

団体契約者 社会福祉法人 **全国社会福祉協議会**

〈引受幹事保険会社〉損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL：03（3349）5137
受付時間：平日の9:00～17:00（土日・祝日、年末年始を除きます。）
この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。

取扱代理店 株式会社 **福祉保険サービス**

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL：03（3581）4667
受付時間：平日の 9:30～17:30（土日・祝日、年末年始を除きます。）

〈SJ21-10723 より抜粋して作成〉

令和４年度
社会福祉施設総合損害補償

しせつの損害補償

インターネットで保険料試算できます
ふくしの保険 検索

老人福祉施設、障害者支援施設、児童福祉施設などに

スケールメリットを活かした割安な保険料で充実補償をご提供します！

◆加入対象は、社協の会員である社会福祉法人等が運営する社会福祉施設です。

プラン1 施設業務の補償（賠償責任保険、動産総合保険等）

❶ 基本補償（賠償・見舞）　保険期間１年

▶保険金額

		基本補償（A型）	見舞費用付補償（B型）
賠償事故	身体賠償（１名・１事故）	2億円・10億円	2億円・10億円
	財物賠償（１事故）	2,000万円	2,000万円
	受託・管理財物賠償（期間中）	200万円	200万円
	うち現金支払限度額（期間中）	20万円	20万円
	人格権侵害（期間中）	1,000万円	1,000万円
	身体・財物の損壊を伴わない経済的損失（期間中）	1,000万円	1,000万円
	徘徊時賠償（期間中）	2,000万円	2,000万円
お見舞い等	事故対応特別費用（期間中）	500万円	500万円
	被害者対応費用（１名につき）	1事故10万円限度	1事故10万円限度
	傷害見舞費用		死亡時 100万円 入院時 1.5～7万円 通院時 1～3.5万円

新型コロナウイルスを含む特定感染症に新たな補償が追加されました！

NEW 施設の感染症対応費用補償
休業補償から各種対応費用までワイドな安心

❶休業や縮小営業による収益減少はもちろん、収益減少を防止・軽減するための人件費なども補償
❷消毒・清掃費用や自主的なPCR検査費用など、かかった費用を幅広く補償
❸感染症対応特別費用で定額20万円を早期に受取り

プラン2 施設利用者の補償

プラン3 職員等の補償

プラン4 法人役員等の補償

●この保険は全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約（賠償責任保険、医師賠償責任保険、看護職賠償責任保険、雇用慣行賠償責任保険、役員賠償責任保険、サイバー保険、普通傷害保険、労働災害総合保険、約定履行費用保険、動産総合保険、費用・利益保険）です。

● このご案内は概要を説明したものです。詳細は「しせつの損害補償」手引またはホームページをご参照ください。●

団体契約者 社会福祉法人 **全国社会福祉協議会**

〈引受幹事保険会社〉損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL：03（3349）5137
受付時間：平日の9:00～17:00（土日・祝日、年末年始を除きます。）

取扱代理店 株式会社 **福祉保険サービス**

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL：03（3581）4667
受付時間：平日の 9:30～17:30（土日・祝日、年末年始を除きます。）

（SJ21-12224 から抜粋）

福祉の世界へ就職をお考えの方
ご相談は長野県社協福祉人材センターへ!!

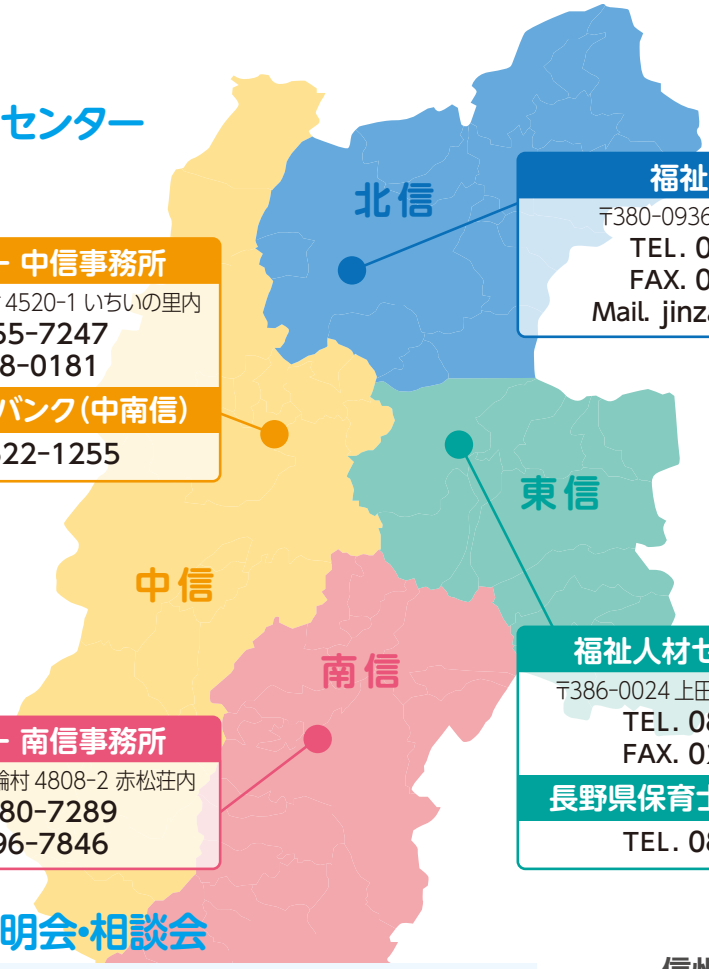
長野県社協福祉人材センターは、福祉・介護事業所で働きたい方の相談を受け、希望する事業所と求職者をマッチングする無料職業紹介をしています。

県内にキャリア支援専門員・保育士支援専門員を配置し、求職者・求人事業所の相談に対応します。キャリア支援専門員とは、高齢者施設や障がい者施設で就労経験があり、福祉人材の確保・定着に向けて、福祉・介護の職場への就職希望者と福祉施設事業者とのマッチングを図るための支援を行う専門の相談員です。また、保育士支援専門員は保育分野に就職を考えている方に対して専門の相談員です。長野県４地区それぞれのキャリア支援専門員が、一人ひとりに寄り添った就職支援を行います。まずは、お気軽にご相談ください。

私たちが長野県の
キャリア支援専門員・保育士支援専門員です!

福祉・介護・保育の求人のことなら
何でもご相談ください!

長野県の社協福祉人材センター



福祉人材センター
〒380-0936 長野市中御所岡田 98-1
TEL. 026-226-7330
FAX. 026-227-0137
Mail. jinzai@nsyakyo.or.jp

福祉人材センター 中信事務所
〒390-1301 東筑摩郡山形村 4520-1 いちいの里内
TEL. 080-2055-7247
FAX. 0263-88-0181

長野県保育士人材バンク(中南信)
TEL. 070-2622-1255

福祉人材センター 東信事務所
〒386-0024 上田市大手 2-4-5 大手町会館2階
TEL. 080-2080-7288
FAX. 0268-71-5400

長野県保育士人材バンク(東北信)
TEL. 080-2055-7289

福祉人材センター 南信事務所
〒399-4511 上伊那郡南箕輪村 4808-2 赤松荘内
TEL. 080-2080-7289
FAX. 0265-96-7846

今後の職場説明会・相談会

令和５年１月26日(木)	地区相談会　須坂会場
令和５年２月14日(火)	地区相談会　佐久会場
令和５年３月１日(水)	第３回福祉の職場説明会・就職相談会　松本会場
令和５年３月６日(月)	第３回福祉の職場説明会・就職相談会　長野会場
令和５年３月18日(土)	『ながの・福祉の仕事』オンラインフェア

信州福祉・介護のひろば
ホームページ
https://fukushi-nagano.jp

詳しくはサイトをご覧ください

未来を担うふくしびと

みらふく

MIRAFUKU

上田千曲高等学校

ケアコン2022の入賞チームのうち、8チームが学生でした。入賞した学生チームを「みらいを担うふくしびと」として、学校ごとに紹介します。

会話の中から気づいてもらえる工夫

上田千曲高等学校は、上田市にある全日制・定時制の学校で、全日制には、メカニカル工学科、電気科、建築科、商業科、食物栄養科、生活福祉科が併設された県下でも有数の総合専門高校です。生活福祉科は、高齢者・障がい者等を対象とした知識および支援技術の習得をはじめとし、福祉現場職員による講義や地域との交流・実習などを取り入れた実践的な授業を行っています。

●上田千曲高等学校生活福祉科 3年生C

ケアコン2022規定部門で審査員特別賞を受賞した「上田千曲高等学校生活福祉科 3年生C」チームは、授業の一環として「ケアコンに出て、阿部知事に会おう!」と参加が決まりました。チームの4名は、利用者に言葉で直接的に伝えるのではなく、本人との会話の中でどうしたら気づきや自立につながるか、話し合いを重ねてきたそうです。

自分が役に立ちたい!

高校から「生活福祉科」という専門的な学びを選択した皆さん。福祉科に進んだきっかけを聞きました。

中学生の頃、あるテレビ番組で「2025年問題」について知った中島 朱夏さん。介護や医療が追い付かなくなることに漠然と問題意識を抱き「自分が役に立ちたい!自分がやらなきゃ!」と思い、福祉の道に進みました。実際に上田千曲高等学校で勉強をしてみて「興味があることを知り、身につけていくことは、とても楽しい」と語ってくれました。

少し、緊張した面持ちで取材に応じてくれた皆さん。将来は、「言語聴覚士になりたい」「児童発達支援センターで働きたい」「介護福祉士になって、介護現場で働きたい」などそれぞれでしたが、皆さん揃って、「長野県内で」という枕詞が付いていました。キラキラした笑顔で福祉の現場を明るく照らしてくれる未来に「期待!」です。

キラキラの笑顔で取材を受けてくれました

緊張した面持ちで表彰の説明を受ける皆さん

表彰式の様子

受賞作品の動画はコチラから

WEBでもご覧になれます

●ご感想、お問合せ、掲載希望等は下記へお寄せください。

長野県社会福祉協議会
総務企画部 企画グループ
TEL 026-228-4244
FAX 026-228-0130
E-mail kikaku@nsyakyo.or.jp

webでもご覧になれます

長野県社会福祉協議会

福祉・介護べんり帖

長野県福祉研修共同サイト きゃりあねっと

信州福祉・介護のひろば

ざわめくアート

『夢』(筆遊び)

筆ペン、カラー筆ペン

作者:小林　優(こばやし　ゆう) 39歳
安曇野市在住

優さんは子供のころから発達障害の傾向があり、他者とのかかわり方が上手ではなく、他者と向き合うときはとても緊張してしまうそうだ。そのうえ強いドライアイのため、長時間目を使うことが困難で、疲れはててしまうようだ。現在はご両親と3人で暮らし、家にこもる生活で、外に出て何かの活動をすることができないでいる。今の状況をなんとかしたい気持ちは強いが、何ともできないもどかしさの中にいる。そこで自分にできることとして、文字を変形したり、模様を書き込んだりしながら作品を書く楽しみを見つけたそうだ。この先への不安や、前向きに一歩でも出なければという焦りと、ままならないもどかしさは相変わらずだが、筆遊びで自分の想いを作品に込めていくことが、今の優さんの癒しになっているという。

何枚もの作品を見せていただいたが、一見楽しそうな作品の奥底には、彼女のこれまでの苦労や、切ない、もどかしい想いが込められているのだと思うと、一層愛おしくなる。優さんに幸あれ、と願わずにはいられない。

(ながのアートミーティング　関　孝之 記)

第802号　2022年(令和4年)12月25日発行(毎月25日発行)
●発行所／社会福祉法人長野県社会福祉協議会　〒380-0936 長野市中御所岡田98-1　TEL 026-228-4244　FAX 026-228-0130　E-mail info@nsyakyo.or.jp　URL http://www.nsyakyo.or.jp/
●編集制作・印刷所／有限会社サンライズ　●購読料／1部30円(本会会費に含む)